Jaspers Society of Japan

ヤスパース藝術哲学における オルガノンの意義について

伊　野　　連

はじめに

――「藝術は哲学のオルガノンである」(シェリング) ―― ヤスパースは数度にわたり、その著書の中でこの言葉を口にしている。とくに『哲学』(1932年)においては、もともと他の哲学者からの引用があまり多くないこの書にあって、この句は慎重な読者に一種独特な印象を与えるだけの十分な存在感を有していた。それはこの言いまわしが、まず、シェリングの言葉[(1)]をそのままシェリングの言葉として引用していることを特にヤスパースが強調しているように見えるという点で、ついで、同時にシェリング哲学の批判的摂取によるヤスパース独自の見解の生成を如実に示しているという点で、非常に興味深い。またヤスパース哲学の展開に関する、すなわち第一の主著と目される『哲学』から、同じく第二の主著とも呼びうる『真理について』への移行に関する、重要な示唆を与えてくれるものでもあろう。なぜならこの言葉は二つの主著のいずれにも登場し、両書それぞれの体系的構成におけるこの語の位置づけもしくは意義を検証することが、あの浩瀚な両大著の、〈オルガノン Organon〉から見たいわば定点観測にも等しい働きをしてくれるものとも考えられるからである。

一方ヤスパースほど、形而上学的たる藝術 (VdW, S. 917) を力説した哲学者は無かったし、その「藝術において哲学する」(Ph. III, S.192) ことを哲学のまぎれもない本質の一つとして掲げたヤスパースにとって、それでは藝術とは、そして〈藝術の哲学 Philosophie der Kunst〉とは、いったい何を意味するのであろうか。

こうして本論文は、ヤスパースの哲学の一般問題を考察するものであるが、Organon からの視点という新たな試みであること、そして考察の目標がヤスパースにおいて藝術哲学はいかにして可能であるかの究明にあること、その二

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

つを特色としている。

I　オルガノンの二つの用法

ヤスパースの Organon へと問題を特化する前に、哲学的な伝統からオルガノンを確認し直すべきであるが、紙幅の制約上それは省略する[(2)]。ここでは本論文の問題点をあらかじめ整理しておく。ヤスパースによれば〈論理学は哲学の Organon である〉[(3)]。一方、先のシェリングの言葉を踏まえてヤスパースは「藝術は哲学の Organon である」とも述べているのであったのだから、〈藝術〉は Organon としての〈哲学的論理学〉に相当するものであることになる。ヤスパースにおける藝術哲学とは、このように哲学において藝術が持っている重要な意義を認め、それを正当に評価し解明することを目的とするものである。

まず、ヤスパースが自著において Organon について言及している例は、次のような二つの型に大別することができる。

甲　〈Organon としての藝術〉について述べたもの――これがシェリングのあの言葉を踏まえたものであり[(4)]、ヤスパースの藝術哲学という本論文のテーマと関わってくる点で、今回最も注目すべき重要なものである。

乙　「哲学的論理学」構想における Organon ――『真理について』の「第一序説」（「哲学的論理学について　全著作への序説」）で集中的に論ぜられている。周知のように同書はナチス政権下で執筆が続けられ、1947年を待って公刊された。本来の論理学が〈論理計算 Logistik〉へとはっきり衰退しつつあった当時、ヤスパースが時流に逆らう形で、本来の〈哲学的な〉論理学を表明したのであるが、その本書のまさに本質に関わるのがこの〈オルガノンとしての論理学〉というテーゼである。前ソクラテス期哲学者以来、数千年に及ぶ〈ロゴス〉の歴史的意義と、ヤスパース哲学の根本である〈理性〉の働きとの結びつきをあらためて喚起するために、ヤスパースは「理性のオルガノンとしての哲学的論理学」という表現を繰り返し用いている（先述註５）。

今回は乙についての本格的な論究は見送ることとして、もっぱら甲に重点を置きつつ、まずヤスパースの主要著作中からこれに該当する記述を三点抜き出してみる。

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

実例：甲—α

①「藝術は暗号をして語らしめるが、しかしその事柄は、他のいかなる仕方でも述べ得ないもので、しかもその述べられたことが、すべての哲学することがその周囲を運行しているあの本来的存在に的中するので、したがって『藝術は哲学のオルガノンである』(シェリング) となる」(Ph. III, S.192)。

②「〔科学的に不可知なものの開明へと、しかもまさしく哲学的方法を意識しつつ、思考が解き放たれる。〕そうすると万物の言葉が聴き取れる hörbar ようになり、神話は意味あるものとなる。文藝 Dichtung と美術 Kunst[(5)] とが『哲学のオルガノン』(シェリング) となる。とはいえ神話の言葉が知識内容と混同されるわけではない」(VuW, S. 26. なお、引用文中の〔 〕内は引用者による補足。以下同)。

③「少なからぬ哲学者にとっては彼らの固有の理性の真理 Vernunftwahrheit を顕現させる上で文藝と藝術は不可欠のものであり、彼らは文藝と藝術を哲学のオルガノンとして語っている (シェリング)」(gP, S. 37)。

今回最も重要視している引用が上記の三つである。その理由は、次の点にある。

一、いずれもヤスパースがわざわざ〈シェリング〉と名指しして彼の言葉を引いている点。

二、藝術という、哲学にとってきわめて扱いづらいものについてあえて哲学的に語ろうとしているという点。

一についてはいくつかの解釈が可能である。まず、このテーゼをシェリングに負うているということを明確にしておきたいというヤスパースの意図があるだろう。それはシェリングに対する敬意の表れとも取れるが、一方では自らの考えとシェリングの考えとをあくまで峻別しておきたい旨とも受け取れる。というのは、シェリングのこの時代 (自然哲学期から同一哲学期[(6)]) における藝術観は、後年になってほかならぬシェリング自身によって修正を余儀なくされたものであるし、またヤスパース哲学にとってもそのままでは受け容れがたいものだからである。これらの点については後で詳論する。また一についてはさらに、シェリングの意味するオルガノンの意味について読者に注意を喚起するものと読むことも可能である。

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

次に、甲のグループに連なるものを第二の主著『真理について』の中から[7]さらに引用しておきたい。藝術論を展開している部分だけに、引用元も自ずと限られてくる。

実例：甲—β

④「根源的で精神的な直観・行為・形成物や、神話・文藝・美術・宗教的伝統（祭式、祈り、儀式、聖典）のうちで哲学に先立って真理を現前へともたらすもの、これらすべては哲学することにおいていわばその〔＝哲学することの〕Organon として把握され、哲学することはこのような助け無しには近寄り難いままであるものを了解する。哲学することはその理解の中に浮かんで来ないものを指示し、意識的にさせ、変化させるが、しかし損なわれないままにしておく。それ〔＝哲学すること〕は己れにとって Organon となるものを退化させることなく、このような直観・行為を遂行することのうちでますます一層深い関わりをもたらす」(VdW, S. 871)。

⑤「これら〔根源的〕直観との不断の交渉は——たとえいかなる意味で生ずるとしても—— これら直観を哲学することの Organon へと変化させる」(VdW, S. 916)。

⑥「この〔＝根源的直観の〕世界は哲学の Organon としていわば哲学に組み入れられている」(VdW, S. 918)。

⑦「それ〔＝悲劇的な知〕は、詩を己れの Organon として把握しその内容を反省しつつ我がものとする哲学的思考を通じて、明らかになる」(VdW, S. 965)。

⑧「〔神話と啓示が語ったものを、たとえ哲学的に変形させてでも理解し知ろうとする〕結果、文藝、美術、宗教で客観的となったものが哲学することの Organon となる」(VdW, S. 1050)。

上記はいずれも『真理について』最終篇の第三章での〈根源的直観による真理の完結〉をめぐっての記述である。ここでの Organon はいずれも根源的直観の機能について語られている。そしてこれこそがヤスパース藝術哲学の独自性であり、シェリングのテーゼ「藝術は哲学のオルガノンである」に対して、明らかに論の深化が見られる点である。

ヤスパースは精神（いわゆる包括者の精神でなく広義の精神）史の上で哲学

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

に先立つ神話・詩・藝術・宗教行為などに、真理追究の働きとそれによってもたらされる現実性 Wirklichkeit を認めている。ヤスパース哲学とは最終的には、神話や宗教、そして藝術などの「根源的直観」に基づく真理を超え、理性に基づく哲学的真理の完結を図るものである。哲学登場以前の真理意識に欠如しているのは哲学的反省にほかならないが、だからといってこれらの真理意識が虚偽なるものとして完全に退けられるわけではない。むしろその逆に、そういった根源的直観、あるいは暗号論における藝術という第二言語が、第三言語としての哲学に欠かすことのできない要素であり、一部ですらあるということ(『形而上学』参照)、そのことをここでの Organon は意味しているのではなかろうか。このような悲劇的直観から哲学的理性への時代的転換は、世間の定説に見られる〈神話〔さらに叙事詩〕の時代〉から〈悲劇の時代〉への転換(ソフォクレスはまさにその象徴である)とも異なる視点から認められたものであり、後に彼が提唱したいわゆる「枢軸時代 Achsenzeit」(『歴史の根源と目標』参照)において生じた転換である。つまり〈反省 Reflexion[8]〉的思惟の発生により、すなわち「方法的哲学によって mit dem methodischen Philosophieren」、人間精神にかつて無かったほどの「飛躍 Sprung」が生じたわけであるが、だからといってそれ以前に「人類を充たしていた真理意識が虚偽となるわけではない」のであって(Vgl. VdW, S. 915ff.)、今や哲学はそれら根源的直観を自身に摂取してゆかねばならなくなったのである。もっともそれは単なる無自覚・無批判な摂取ではなく、ヤスパース哲学の大原則である〈我がものとすること Aneignung (Aneignen) と論争すること Polemik[9]〉を伴った〈批判的摂取〉でなければならない。「哲学することはこれら〔根源的〕直観をそちら側では活発にさせ高めつつ、自らは再び自身の奥深いところ[10]でそれら〔直観〕に心打たれ、それらと闘って克服したり、あるいは我がものとして役立てたり、それらとは切っても切り離せない状態にある。〔また〕哲学することはそれらを他なるものとして了解したり抵抗したり、あるいは自らのうちに受け容れ立証したりするが、ついにはそれらのうち若干のものを自らにとっては了解し得ないものとして対立、他なるものとして承認するに到る」(VdW, S. 916)。

このような〈我がものとすることと論争すること〉こそ引用⑤の「不断の交

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

渉」にほかならず、哲学によるこのような直観とのまさしく斬り合いともいうべき過程を経ることによって初めて、藝術〔根源的直観〕が哲学の Organon になるというのであれば、そこでは当然 Organon と〈Organismus 有機体〉との語としてのつながりが闡明になる。哲学は藝術を自己の血肉と化し、その意味で両者は有機体として一体化し、その働きは〈道具・器官 Organ〉として機能する。このように藝術は哲学にとって他なるものであるが、しかも哲学にとって原動力となるものでもある。――これはそのまま理性の本質にも関わる。ヤスパースによれば「哲学的論理学の最終目標は、最も疎遠なものがなお自分に最も疎遠なものと、はるかなものではあれ唯一的な超越者において相互に見出すことである」(VdW, S. 7)。理性の倦むことの無い衝動により、論理学は断絶の危機を乗り越える。換言すれば「論理学的な熟慮の意義は、思惟しながらの交わりの Organon となることにある」(VdW, S. 7)。哲学することはその内なる他なるものを己れの原動力とする。ヤスパースの Aneignung と Polemik はこのような意味を有するのである。ここでまた我々は、かつてヤスパースが『哲学的世界定位』において以下のように述べていたことを想起するであろう。すなわち「哲学は、哲学でないものと区別すると同時に採り入れようともするものとの自己識別において、自らを示すのである。他者が自分を否定したり去勢したりしようとするのがわかっている以上、哲学は他者を自己の外に抱える存在の、その明るさ Helligkeit[(11)] として、闘争の中で己れ自身へと達せねばならない」(PhI, S. 292)。

II　オルガノンとオルガン

一方オルガノンとオルガン Organ との関係はどうであろうか。以下に示す引用は、その点で非常に興味深いものである。

実例：甲―γ

⑨「文藝は我々が世界空間や己れの本質のあらゆる内実を最も自然で自明に把握するための Organ である」(VdW, S. 917)。

ヤスパースはなぜここで Organ と言って Organon と言わなかったのであろうか。例えば三とおりの考え方ができる。

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

一、本来 Organon とすべきであったのに Organ としてしまった、つまりヤスパースの誤りであるということ。

二、両語を明確に区別して、ここではあえて Organ を用いているということ。

三、両語を特別に区別せず、単にここでは Organ を用いているがさしたる理由は無いということ。

それぞれの考え方をさらに検証してみると、まず一については、ヤスパースによる（それもとりわけ『真理について』における）Organon と Organ の違いに関して確認しなければ、仮に彼が誤っていたとしてもそれを指摘する根拠が得られない。そしてこの確認がなされれば、それはそのまま二について、すなわちヤスパースがいかに両語を使い分けていたかを理解する上での重要な手懸りとなるだろう（三については、ならば同じようにさしたる理由も無く Organon を用いてもいいわけであり、明らかに説得力を欠く）。しかしながら引用するとはいえ、Organon と違って Organ の用例は格段に多くなり、その意味も多岐に亘るものとなる。[(12)] ここではやむなく、いくつかの代表的な用例に限って言及するにとどめたい。

『真理について』の中で Organ は計十五ヶ所登場する。そのうちのいくつかは〈感覚器官〉〈生理学的器官〉〈動物器官〉等、単なる〈生物的な器官〉と捉えて問題は無いと思われる（Vgl. VdW, S. 30, 57, 237, 329f.）。

さらに〈哲学的な機能〉を司るものを意味する例が数点ある。

⑩「存在確認の Organ」（S. 201）

⑪「伝統的な哲学すること、そのことの実体を捉える Organ」（S. 169）

⑫「永遠なる認識作用が、時間的形態をまとった Organ」（S. 202）

⑬「〔心理的能力や観察される経過などではなく、遂行の中で明るみに出され、認識理論的に『解釈される』ようなオルガン、つまり〕存在について確信する Organ」（S. 606）

こういった例が見られるが、以下の記述も注目に値しよう。

⑭「〔心理学や社会学に有効な道具ではなく、深遠・無秩序・絶望的混乱から脱出するための〕単なる観察が与える以上に深い把握および確信化の Organ を要求する真理根拠、それが開示されることを我々は求める」（S.708）。

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

これは Organ そのものとしては⑬とほぼ同じ意味であるが、その〈器官〉が「真理根拠」によって「要求される」と述べられている点に興味を惹かれる。なぜなら⑭の引用直前部分では「心理学や社会学で有効な道具」では役に立たない「限界」に佇む我々にとって必要なのがこの〈Organ〉にほかならぬと、ヤスパースははっきり〈道具 Werkzeug〉と〈Organ〉とを区別している(ibid.)からである。このようにヤスパースは、Organ にはやくも能作的・主体的な働きを与えている。このことから、これら〈Organ〉に、哲学する働きと有機的に一体化した、作用そのものが主体性を備えた〈方法〉〈手段〉といったニュアンスを認めることができるだろう。『真理について』末尾近くの以下の例はそれを裏づけるものでもある。

⑮「存在は〔……〕存在認識の Organ としての私の全存在を通してのみ、私に感知されうるものとして把握される」(VdW, S. 1029)。

こうしてOrganの意味づけが判明したことによって、先の課題だったOrganonと Organ との違いも、より明瞭に現れてきたのではなかろうか。ヤスパースにとってOrganonとは、

一、アリストテレス以来の論理学の〈代名詞〉、すなわち論理学の〈権化〉(もちろんこれは後にカントによってなされる論理学の区別を度外視したものである)

二、シェリングに代表される〈自然－精神〉の繋がり・統一(ヤスパースの包括存在論で言い換えれば「理性による紐帯としての働き」)

三、さらには〈ロゴス〉－〈理性〉と等しい働きをするもの

以上のような意味を持つものであった。

それに対して Organ は、そのような働きを行なう作用的主体であり、またそのような働き・作用そのものでもあり、機能自体である。表現を変えれば、方法としての Organ を論ずること、それが方法論としての Organon である、と言うこともできるのではなかろうか。先述した引用⑨の場合「～把握するための Organ」と言っていたのと、以下の引用とを対比してみるといいだろう。

⑯「哲学は悲劇的な知の思想的側面としてでは自らを善しとしない。悲劇的な知は神話と歴史の媒介のうちに存在を見る。それは叙事詩と悲劇の内

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

なる詩を通じて表明する。それは文藝を己れの Organon として把握し、その〔＝文藝の〕内実を反省しつつ我がものとするような哲学的思惟を通じて明らかになる。しかし哲学は、にもかかわらず悲劇的なものを越えることで初めて本来的存在になる」(VdW, S. 965)。

この「文藝を己れの Oganon として把握する」主体は、もはや〈悲劇的な知〉の主体ではなく〈哲学的思惟〉の働きである。〈文藝において哲学すること〉、すなわち〈哲学にとっての文藝〉は、「哲学の論理（学）」と化しているのである。そしてそれこそがヤスパースの言う Organon にほかならない（しかしその Organon としての文藝も、哲学することの全過程においては、理性そのものに到るまでのいまだ過渡的な段階に過ぎないのは言うまでもない)。

結び

以上見てきたように、ヤスパース哲学において Organon は、

一、超越者の第二言語、さらに根源的直観としての藝術という、哲学にとっての他なるものを、哲学が〈反省的思惟によって〉〈我がものとする〉という意味において、

二、また〈哲学の器官〉という本来の意味での Organ が、正しく〈哲学のロゴス〉として機能するような、まさに〈哲学的な論理学〉という意味において、

やはり重要な意義を持つものであった。

ヤスパース哲学は藝術による暗号解読を乗り越え、最終的には理性の段階へと到ることを目指すものである。同じ〈藝術哲学〉と称してもヤスパースは初期シェリングのように藝術（詩）を最高位に据える段階にとどまることをしなかったし、一方でまた後期シェリングのように啓示や神話の方向に進むこともしなかった。[13] ヤスパースが「藝術は哲学のオルガノンである」という言葉をシェリングの言葉であることを明記して引用した意図は、自分がこの見解を彼に負うていることの申告であると同時に、自分と彼の見解がはっきり異なっていることをも明確に示すことであった。また、自己の哲学において〈藝術の哲学〉の段階は〈哲学の哲学〉という最終段階の一つ前のものであるのだということ

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

をより鮮明に示すものではなかったか、ということ。あるいはヤスパースはシェリングの Organon を踏まえつつも、それとは区別された自身の Organon を表明しているのではなかろうか、ということであった。

ここでさらに『真理について』に見られる Organon の意義について補足的に整理すると、

一、哲学的論理学における Organon は、理性が論理的明晰さによって実存相互に保証する普遍性を象徴するものである。——参考：「理性の Organon としてのこの〔哲学的〕論理学は、それぞれ個々人の形成過程となる」(VdW, S. 10)。

二、藝術哲学における Organon とはシェリング哲学の意味での〈自然－精神〉（包括存在論での図式では〈世界－識存[14]〉さらには〈超越者－実存〉となる）を媒介するものである。——参考：「哲学的論理学は、思惟の真理でないものを、思惟によって真理として現前化しようとし、また哲学的生の Organon にしようとする」(VdW, S. 226)。

おおむね以上のことが言えるであろう。それではシェリングのような〈藝術としての哲学[15]〉ではなく、もちろん「藝術について哲学する」(Ph. III, S. 192) のでもない、そのような（本論文の冒頭で示したごとき）、ヤスパースが標榜している「藝術において哲学する」(ibid.) 藝術哲学とは、はたしていかにして可能であるか。それはおそらくカントのオルガノン論を踏まえ、さらに『判断力批判』のような徹底した感性論、藝術を我々が認識するその作用についての考察が、さらなる手がかりとなるのではないかと、本論者には思われる。しかし残念ながら、あくまでそれは次なる課題として提示されるのみである。[16]

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

略号表

Ph. I. ＝『哲学的世界定位』
Ph. III. ＝『形而上学』
VdW. ＝『真理について』
UZG. ＝『歴史の根源と目標』
VuW. ＝『現代における理性と反理性』
gP. ＝『大哲学者たち』

上記他のヤスパース主要テクストからの引用に際して、早稲田大学佐藤眞理人教授作成のテキストデータを使用させていただいた。ここに謝意を表する。

註

（1） もっともシェリングは、これに続けて「〔藝術は哲学の〕唯一のドキュメントである」とも言っている（Vgl. Schelling, *System des transcendentalen Idealismus*, Sämtliche Werke, 1856-61, I. Abtheilung Bd. III, S. 349, u. a.）のであるけれども、こちらはヤスパースによって引用されることは無かったようである。

（2） ヤスパースと Organon について考える上で、論者は以下の哲学者ならびにその著作にとりわけ重要な意義を見出している。だがこれらについての詳論は次の機会に譲りたい。

・プラトン（『国家』『ティマイオス』）とアリストテレス（「オルガノン」『問題集』）
・カント（『純粋理性批判』『論理学講義』）とヘーゲル（『小論理学』）
・W. v. フンボルト（『カヴィ語研究序説』）
・F. v. シュレーゲル（『文藝対話』）とシェリング（『超越論的観念論の体系』）
・彼らに次いで重要なのは、F. ベーコン（ヤスパースも彼の名を挙げている。Vgl. VdW, S. 18）、ヴィーコ、カントに関連してランベルトとハーマンおよびヘルダー、その他。

（3） 「哲学的論理学の概念性は理性の Organon である」(VdW, S. 9)。また、「理性の Organon としての論理学」「理性の Organon としての哲学的論理学」(ibid. S. 10) という表現も同様である。

（4） ちなみにヤスパースによる唯一のシェリング論の単著 „*Schelling. Seine Größe und Verhältnisse*“（1955年）には Organon という語は登場しない（同著ではヤスパースはシェリングの例の言葉を採り上げていない）。

（5） ヤスパースが単に Kunst という語で〈造形藝術〉、とくに絵画を中心とする、いわゆる日本語で〈美術〉呼ばれるものを指していたことはいくつかの文脈からも明らかである（z. B. VdW, S. 915ff.）。

（6） シェリング哲学の時代区分には N. ハルトマンやシュレーター等諸説あるが、

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

ここでは詳論しない。

（7） なおここで資料を『真理について』に限った理由の一つは同書ではシェリングを名指しての例の言葉が登場しないことであるが、本論者は可能なかぎり多くのヤスパース著作からOrganon使用例を抽出する作業を続けていて、それらについては別の論考を用意している。ちなみに第一の主著『哲学』にOrganonという語が出てくるのは上記引用①のほか三ヶ所あり、いずれも『哲学的世界定位』においてである：

・「自然科学のOrganonとしての数学」(S. 198) ――機関・論理（方法）という意味でのOrganon

・「体系的哲学は、偉大な体系的諸哲学に対し通路を空けておく、独創的ではないが始原的な哲学する働きのためのOrganonであるにすぎない」(S. 287)。――機関・論理（学）という意味でのOrganon

・「哲学は手段ではない。なぜなら哲学はOrganonとしてその機能からは切り離せないからである」(S. 336)。――機関・(有機的)機能という意味でのOrganon

（8） ちなみにヤスパースでは「哲学的反省」と藝術の結びつきもOrganonと理解されている。例えば『哲学者としてのリオナルド』の次の記述を参照。「彼〔＝リオナルド・ダ・ヴィンチ〕において美術は哲学のOrganonと化している。なぜならここでは認識する者としての藝術家の行為がそのまま現実的となり、そして反省において受け容れられているからである」(*Lionardo als Philosoph*. In: *Philosophie und Welt*, 1958, S. 258, oder: *Aneignung und Polemik*, hrsg. v. H. Saner, 1968, S. 110)。だからこそヤスパースは、リオナルドを「偉大な様式の唯一の美術家－哲学者」(ibid.) と讃えるのである。

（9） 当然彼の哲学史論集 „Aneignung und Polemik“（先述註）のタイトルは、その姿勢の表明である。

（10） 例えば『哲学』ではそこは、彼の言う絶対意識 absolutes Bewußtsein として論ぜられている（『実存開明』参照）。

（11） このいかにもヤスパースらしい表現は、もちろん彼の実存〈開明 Erhellung〉の思想に通じている。

（12） „ὄργανον“ を語源とする各ドイツ語について簡単に整理しておく。Organonは元来ギリシャ語で「道具 Werkzeug」を意味する語に由来し、その形態のまま受け継がれたもので特別な術語としてのみ用いられる。そのため一般的なドイツ語とは言えないが、他方同じ語源でもOrganはドイツ語と化しており、標準的な辞書にも載っている。「器官」「道具」その他を意味する多義語。さらにOrgel となるとこれはもはや純然たるドイツ語と言ってもよく、いわゆる教会にある楽器「(パイプ) オルガン」である。もう一つの一般的な語である Organismus は「有機体」「生物組織」等様々な意味を有するきわめて一般的なもの

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

であり、ヤスパースが用いる場合もその文脈が圧倒的に多い。Organisation も同様に「機構」「体制」「組織・協会」等ごく一般的な語。しかし Organum となるとこれはまた特殊な言葉（中世音楽、中世から近代初頭の思想用語。例：Novum Organum ノウム・オルガヌムなど）であり、Organon のラテン化したものとして、やはり一般的なドイツ語としては用いられない。以上 „DUDEN. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden.“ 3., völlig neu bearb. und erw. Aufl. -1999他を参照した。

(13) このあたりの（もっぱらシェリングのグノーシス性に起因する）ヤスパースの彼に対する批判は、註 (4) に既出の「シェリング論」を参照。

(14) 包括存在（包括者）の「主観的」「内在的」側面にある意識一般 Bewußtsein überhaupt と精神 Geist の捉え直しとして、伴博は（「生存」としての現存在、および「超越的」側面にある実存に対して）「識存」(広義の Bewußt-sein) を提案している（同著『カントとヤスパース――勝義の哲学的人間学への道――』北樹出版、1999年、451頁以下)。ここでは哲学的意識の主観面を緩やかに定義するものとして「識存」と言う。

(15) 海老坂高「シェリングとヘルダーリン ――ふたりの「対話」」（『シェリング論集 2 シェリングとドイツロマン主義』伊坂・森編著、晃洋書房、1997年に所収）での「シェリングにとって藝術哲学は藝術のための哲学ではなく、藝術としての哲学である」(38頁) という海老坂氏の見解は、本論文におけるシェリングとヤスパースの差異（I 参照）を理解する上で非常に有効であると思われる。疾風怒濤時代からロマン派全盛期という「西暦 1500 年から 1800 年にかけてのヨーロッパ」(Vgl. UZG, S. 103) の、それも〈黄昏〉に、親友ヘルダリーンやシュレーゲル弟を論争相手として生きた、まさに〈藝術に酔える〉若きシェリングと、そのような日々は夢想することしかできないヤスパース（そして我々）との、決定的な隔たりが存在している、ということなのであろうか。

(16) カントはヤスパースにとって、オルガノンという個別論においても、哲学すること全体においても、非常に強い影響を及ぼした哲学者であるというのが本論者の見解である。ここで一点だけ示唆しておく。「オルガノンは、認識を拡張するためでなく評価し是正するためしか役立たない」（カント『論理学講義』序論)。

（東洋大学大学院）

NII-Electronic Library Service